



茨城県古河市

教育施策三本柱を実践し、子育て世代を支援する

古河総合公園 写真提供：古河市

茨城県内の44の市町村を、それぞれにゆかりのある筑波銀行の支店長がご紹介します。第24回は、古河市です。筑波銀行は、古河市内に3か所6か店の営業店を設置し、古河市の皆さまと密接な関係を築いています。古河支店長の野澤浩之が、古河市長 菅谷憲一郎氏、副市長 山口裕之氏、教育長 佐川康二氏、市長公室長 鈴木誠氏にお話を伺いました。

●古河市が一番と考えていること、自慢できることはなんですか

本市は古河市、三和町、総和町が合併して平成17年9月12日に誕生しました。3つの市と町は地域性が全く異なり、旧総和町は大きな工業団地が2カ所ある工業のまち、旧三和町は農業が盛んなまち、旧古河市は歴史が長く、商業、文化が栄えたまちです。室町時代後期に鎌倉公方の足利成氏が鎌倉から古河に本拠地を移して初代古河公方となり、それ以後戦国時代にかけて、約130年間5代にわたって続きました。古河公方は、関東一帯の諸豪族の頂点に立ち、戦国時代の関東地方における中心的な役割を担っていました。

本市は、最後の古河公方・足利義氏の娘である氏姫をモデルにした「桃香」を古河市民文化祭のキャラクターとしました。また、合併10周年を記念して、初代の古河公方・足利成氏の11歳頃をイメージしたキャラクター「万寿王丸」（成氏の幼名）も誕生しました。桃香と万寿王丸の作者は、「進撃の巨人」などの大ヒットアニメーションのキャラクターデザインや作画を手がける本市出身のトップアニメーター浅野恭司氏で、特に、万寿王丸は浅野氏から本市に寄贈されました。

平成26年9月に古河歴史博物館、古河街角美術館で「第2回浅野恭司原画展」が開催され、多数の来場者がありました。平成25年10月に開催した原画展が非常に好評だったことから、今年、第2回が行われ、今回も大きな反響がありました。

毎年、渡良瀬川河川敷のゴルフ場で開催している「古河花火大会」は、打上げ総数は例年20,000

発で、東京スカイツリー（634m）と同じくらいの高さまで打上がる三尺玉もあり、花火の打上げ総数、大きさともに関東最大級を誇ります。今年（平成27年）8月1日（土）に合併10周年記念として25,000発を打ち上げ、大々的に開催します。河川敷でゆったりと鑑賞でき、足利市の花火大会も遠くに見ることができる自慢の花火大会です。



古河花火大会三尺玉 写真提供：古河市

●今後の展望を教えてください。

本市は茨城県の西端で、埼玉県さいたま市、栃木県宇都宮市などの大都市に比較的近い位置にあります。人口は減少しつつあり、近頃は減少のスピードに歯止めがかかってきましたが、合併後10年間で約4,000人減少しました。2040年には20～39歳までの若い女性の43～46%がいなくなるという試算もあり、雇用、子育て、教育の3つの施策を強力に進めなくてはなりません。

日野自動車日野工場の本市移転により、雇用は拡充すると期待しており、今後は、教育に力を入れます。教育方針が市民に満足されない場合、教育の盛んな近隣都県の学校に児童生徒が行ってしまうと考えられ、それを食い止めるために、平成27年4月に教育に関する三本柱を立てました。

第一の柱は、ICT教育の推進です。平成27年9月より市内の小中学校に学習用タブレット端末を



菅谷市長



山口副市長



佐川教育長



鈴木市長公室長



野澤支店長

生活に適應するための療育を行う施設です。待機児童の問題には、単に保育所の受入れ人数を増やすだけではなく、保育士の雇用の安定や労働環境改善にも取組

導入します。小学校23校のうち3校を重点整備校として児童1人に1台ずつ配り、残る20校には各校に40台ずつ配布します。通信モジュール搭載モデルのタブレットを導入するので、通信機能を使えば校舎内だけでなく、校庭や遠足などの校外活動、児童の自宅でも利用できます。従来導入していたタブレット端末は学校の無線LANに対応する機種で、校舎内での利用に限定されていたことに比べ、飛躍的に活用が進むと期待しています。

第二の柱は、古河塾です。全国一斉に実施される全国学力・学習状況調査によると、本市の子どもたちは、学習意欲は高いものの学習時間が短く、学力が低めだと分かりました。古河塾は、子どもたちに学習の機会を持ってもらうため、放課後の校舎で塾のように学ぶことを目的に始めました。子どもたちは塾に通う時間を取られることなく学習できます。子どもたちの指導は、本市で採用した専門の職員が担当します。

第三の柱は、小学校と中学校の連携です。中学校進学後に、小学校との違いに対応できず、心理的な打撃を受ける子どもたちが出てくるようになりました(中1ギャップ)。小学校と中学校の連携により、子どもたちに無理のないカリキュラムをつくり、学習効果を上げることを目指します。小中連携推進協議委員会を設置し、幼稚園児や小学生をもつ子育て世代の市民を委員に任命したところ、子育ての終わった世代ではわからない、学校のあるべき姿についての忌憚ない意見が出されました。委員の意見を参考に、トイレは温水洗浄機能のついた洋式にし、教室だけでなく体育館にもエアコンを設置します。現在、夏の日中は校庭で運動すると熱中症になるほど暑くなり、住環境も昔とは全く異なります。子どもたちを守るための取組みを積極的に推進しています。

2~3年後には、この様々な取組みの成果が現れ、子どもたちの学力も上がると考えています。

育児の悩みや問題の解決にも取組みます。平成27年4月1日より古河市児童発達支援事業所が古河市児童発達支援センター「ぐるんぱ」に生まれ変わりました。発達に遅れや偏りのある子どもたちに、就学前に日常生活の基本的な動作や集団

み、保育の質も同時に高めながら解決していきます。

このような取組みの財源確保のため、古河市子ども・子育て支援財団を設立しました。放課後児童クラブも財団によって運営します。従来は小学校3年生まででしたが、6年生まで対象を広げました。教育と福祉の枠組みを超えて行政が一体となって実施します。

子育て支援には、市民が相互に助け合うファミリーサポートセンターという仕組みもあります。0~2歳までの子どもを一時的に預かる仕組みで、会員になれば、仕事や冠婚葬祭、趣味の時間の確保などあらゆる理由で利用できます。子育て世代の育児疲れや子どもの虐待を未然に防ぐことが目的です。

日野自動車古河工場は、平成28年内には全面稼働の予定で、従業員も移動してきます。従業員とその家族に本市に定住してもらいたいのので、毎月1回、日野工場から本市内を見学するバスツアーを開催しています。日野市に比べ、本市のインフラが不十分なのではないかと心配する声が多いので、学校などのインフラを見学してもらっています。今年度も見学ツアーを継続して開催し、安心して移住してもらえよう、本市の魅力をアピールしていきます。



歴史博物館 写真提供:古河市

●筑波銀行に期待することをお聞かせください。

中小零細企業に対する融資を手厚く実施してほしいです。本市の事業者は、地方銀行はあたたかい小回りのきく対応をしてくれると感じています。まずは事業者の要望を聞いて、それに対応してもらいたいです。

筑波銀行と協定を締結している自治体が発行している「るるぶ特別編集」は非常に魅力ある取組みで、筑波銀行がうまく地域と連携した活動をしていることが分かります。ひとつの市の情報が集中して掲載されているので、地図に防犯、防災についての情報も加えれば、非常に利用価値が高まると考えています。